

年度 2008 学期 後期	曜日・校時 月曜 2校時	必修選択 選択	単位数 2
授業科目/(英語名)	言語と芸術(文学者の死生観) Language and Art (Life and Death in Literature)		
対象年次 1年次	講義形態 講義	教室	
対象学生(クラス等) 全学部	科目分類 人文・社会科学科目		
担当教員(科目責任者) / Eメールアドレス/研究室/TEL/オフィスアワー 担当教員:山本建雄 /Eメールアドレ: /研究室: /TEL: 819-2300 /オフィスアワー:			
担当教員(オムニバス科目等)			
授業のねらい/授業方法(学習指導法)/授業到達目標(500文字) 授業のねらい: ・授業の中で取り上げた個々の作家の生、創作と死生観との関わりについて理解できる。 ・個々の作家の死生観と受講者のそれとを関係づけ、自己の死生観の充実に役立てる。 ・受講者相互に、作家の死生観の理解や自己の死生観についての意見交換をする。 ・授業で取り上げなかった作家の生、創作と死生観との関わりをにまで理解を広げる。 授業方法: ・作家の生、創作と死生観との関わりについて、文献を用い授業者が講義する。 ・授業で取り上げた話題について、受講者が意見や感想を記述したり、話し合ったりする。 ・受講者が、関心のある作家について、生、創作と死生観との関わりを調べ、発表する。 授業到達目標: ・個々の作家の生、創作と死生観との関わりについて、簡明に表現できる。 ・個々の作家達の死生観をふまえつつ、受講者自身の死生観について文章化や、話し合いができる。 ・自分の関心に従い調べた作家の死生観について、分かり易い紹介ができる。			
授業内容(概要)/授業内容(毎週毎の授業内容を含む)(1300文字) 授業内容(概要) 生命の尊厳が叫ばれる一方で、世間では残虐かつ理解しがたい犯罪が続発している。これらの事件は、私達一人一人に人間の生と死についての再考を促している。本授業では、近現代の作家達が、自らの生と死についてどのように考え、どのように生き、他者の生と死に対してどのようにであったか、更に、これらのことをどのように作品に反映させたかについて、資料を基に理解する。こうした成果をふまえつつ、受講者個々人で、また相互に、その受け止め方、生かし方について考え、自らの生と死についての認識をより深く、より確かなものとする。 第1回 本授業の目的、内容、方法等についての概略の説明 第2回 生と死を巡る今日的状況と受講者の問題意識の確認 第3回 正岡子規における生と死 第4回 夏目漱石における生と死 第5回 芥川龍之介における生と死 第6回 森鷗外における生と死 第7回 樋口一葉における生と死 第8回 石川啄木における生と死 第9回 宮沢賢治における生と死 第10回 斎藤茂吉における生と死 第11回 高村光太郎における生と死 第12回 金子みすずにおける生と死 第13回 遠藤周作における生と死 第14回 作家の死生観をふまえた自己の死生観を巡る話し合い 第15回 関心に従い調べてきた作家の死生観について記述			
キーワード	近現代の作家 死生観 創作 生き方		
教科書・教材・参考書	・教材は、毎回授業者が用意する。 ・授業の中で取り上げた作家及び作品については、関連する新書、文庫を用い理解を広げる。 ・参考となるものについては、授業の中で随時紹介する。		
成績評価の方法・基準等	・授業内容の理解度を評価するために、小テストを4, 5回実施する。 ・話し合いの折には、経過と成果についての報告を各自に求める。 ・調べ学習の成果を文章化させ、内容と表現の両面について評価する。 ・上記の評価を総合したものを、本授業の評価とし、60%以上の達成度をもって合格とする。 ・出席状況も成績に加味する。		
受講要件(履修条件)	・終わりの15回までの受講する意志があること。 ・授業終了までに、関係図書を3冊以上は読む意志があること。		
本科目の位置づけ /学習・教育目標			
備考(準備学習等)			